たものでした。普段あまりお話しする機会がなかっただけに、いろいろ外国語部のことや個人的なことをお聞きできて大変有意義でした。色々お話ししながら私が先生に対して感じたことは、先生は先ず聞き上手だということです。先生より若い私や他の同僚が言うことも、フン、フンと頷きながらじっくりとお聞きになって、それからゆっくりとご自身の意見を言われるのが常でした。また色々伺った時に一番感じたことは、先生は物事を真直ぐに捉え、間違ったことに対しては断固許さないといったところでした。私など色々な状況を考えひるんでしまうことがよくあるのですが、小笠原先生のこの姿勢を見習わなければと痛感したものでした。定年前にお辞めになったわけですが、伺ったところ今後もお忙しそうで、かえって先生にはその方がお似合いかなとも思いました。隠居して枯れた達磨では、先生のイメージから程遠いものがあります。ご自愛されいつまでもはつらつとしていてください。

河内先生と私

松　本　丁　俊

河内先生と私は、不思議に幾つかの共通点があります。まず第一に、今こそ外国語部におりますが、私が外国語部に講師として採用される前は、助手でした、河内先生も同じく助手から講師として迎えられました。ですので河内先生と私は同窓の感じであります。助手と言えば大学のteaching assistantと違い、助教または助理でもない、もっぱら自分の勉強が仕事です。外国では講師の下に副講師assistant lecturerがいますけれど、またそれとも違うものであります。そして第二に、河内先生と私は年も同じ年で、定年を同じ年に迎えられると思っていましたが、先を越されたような気がします。まだまだお元気なのに家庭の

事情で早めたと聴いております、先生はお寺と大学の二足のわらじで大変だったのだと、改めて先生の頑張りを感じました。もう一つは、河内先生と私は、おなじ病を持っております、痛風と言う名前のとおり、風が少しでも動いたら、はれたところが飛び上がるほどの痛みに会うぐらいの痛さが特徴です。ですからいつも河内先生に会うと“ お体の具合はどうですか ”とお互いに確認し合い、どうすれば病に勝つか、どんなお薬を飲んでいるかなどが、最初の言葉であります。

河内先生からいただいた労作『ビルマ―タイ鉄道建設捕虜収容所【医療将校ロバート・ハーディ博士の日誌】1942-45』は、今でも書斎に飾っております。その中にシンガポールの事が書かれています。私が在外研究員でシンガポールにいきましたので、はなしがシンガポールから東南アジアにとび、私の国台湾になりました。そこで台湾はいいところですね、いつか行って見たい、と話が進んで、私も、ぜひともお供させてくださいといいながら、お互いに都合がつかず、残念であるが、在職中実現できなかったけれど、定年を迎えられたことで、これから時間は十分ありますので、河内先生と一緒に我がふるさとを巡りたいですね。そしてビルマ、タイなど東南アジアにも往って、実際に鉄道とか戦時中の捕虜収容所を見てみたいですね、いつまでもお元気でいてください。

小笠原先生と「体操競技部」

百　済　　勇

今年（2004年）も６月の恒例となっている『体操競技部・新人歓迎会』が開催された。新人部員は11名、これほどの男女学生部員増加は初めてのことであった。その『歓迎会』にイリノイ大學遠征の際にお世話になった先生のご